

プリンター

松野 志部彦

変わってるねってよく笑われるけど、ぼくはインクジェットプリンターが大好きだ。他の子はプラレールとかミニカーに夢中で、まあ、ぼくもああいう玩具は嫌いじゃないんだけど、それよりはプリンターを眺めているほうがずっと面白いと思う。

まず、電源をつけた時の、ウィーン、ガチャコ、と起動するのがもうカッコいい。ロボットみたいで。それから、一息つくような間をおいて、カートリッジがレールに沿って動き始めるのも楽しい。そんないかにも機械っぽい機械なのに、吐き出された印刷紙にさわると産みたての卵みたいに温かいから不思議だ。

パソコンの使用は一日一時間までとお母さんに決められているので、ぼくはその間にできるだけたくさん印刷する。昆虫とか自動車の写真とか、あとは電車の時刻表とか、そういうのを印刷するんだけど、正直いうと、プリンターを動かしたいから印刷している節もある。それくらいプリンターが好きなんだ。もちろん、インクや用紙はただではないから、お父さんにもやんわり注意される。大人になったらお金を返すので大目に見てほしい、と日頃から説得している次第だ。

そんなわけで、ぼくは今日もプリンターを動かしている。

我が家のプリンターはパソコンが置いてある机の、さらに上段の棚に設置されているので、僕は椅子に膝立ちして腕を伸ばし、カシャカシャ鳴るリズムに心地良くなりながら用紙を待ち構えた。

出てきたのは赤ちゃんの絵だった。

おや、と思った。

変だな、こんな絵を印刷したつもりはないのに。

首を傾げている間にもプリンターは紙を排出し続け、頭の上からひらひら落としてくる。ぼくは少し焦った。プリンターが壊れたと思ったからだ。

「今日はたくさん印刷しているんだね」

気づくと部屋の戸口にお父さんが立っていた。お母さんもその隣にいて、「紙

を無駄遣いしちゃだめよ」と笑っている。

プリンターが壊れたのだと言い出せず、ぼくは泣きたい気持ちをこらえて床の紙を拾った。そうしている間にも紙はどんどん降ってくる。えらいこっちゃ、と口の中で何度も呟いた。

「なんの絵？」

突然、女の子の声がして驚いた。

近所に住むあかねちゃんが隣に座っていて、ぼくの手にある紙を眺めていたのだ。彼女の後ろにはすすむくんとかずくんもいて、物珍しそうに覗き込んでいる。

「何を印刷してるの？」

「えっと……」

教えてあげようと思ったのに、引出がつかえてしまったように思い出せなかった。どうしてあかねちゃんたちがここにいるかも思い出せない。

カシヤカシヤとプリンターの音が続いている。

「あ、これ懐かしいね」

かず君が紙を拾って言う。

ランドセルを背負った子供の絵だった。

気づけば、彼は別人のように背が高くなっている。それに近所の高校の制服を着ている。他の二人もすっかり大人びていた。茜は見惚れてしまうほど綺麗になり、進はなんだか遅しくなって頭を坊主にしていた。成長期って恐ろしい。

「変なの」

「なんだと、この野郎」

進が低い声で唸り、僕の首を締め上げる。「痛い、痛い」と僕は笑ってタップする。

「ちよっと、ふざけてないで、この紙整理しなきゃ」

茜に叱られ、僕達はバツの悪い思いで作業に戻った。

新しい紙にはネクタイをした男の絵がある。

はて、と不思議がっていると、誰かが目の前に立った。眼鏡を掛けた髪の長い女性。同じ課の奈緒美さんだった。

茜も進も和も、もういなかった。

「やあ」と俺は声をかける。「何してるの？」

「それはわたしが訊きたいんですけど」彼女は困ったように微笑み、俺と同じように屈んで声を潜めた。「課長が呼んでますよ。怒ってるみたいですよ」

「げっ」と顔をしかめてみせてから、慌てて床の紙を拾った。「ちょっと待って。

俺、これまどめなきゃ」

「何を印刷しているんですか？」

「さあ……」俺は首を傾げる。「何だったかなあ」

「わたしも手伝います」

ひらひら落ちてくる紙を追って、二人の手が軽く触れあった。

俺は奈緒美さんの顔を見る。眼鏡の奥にある彼女の瞳も、柔らかくこちらを見つめている。床へ降り積もっていく紙に構わず、俺達はしばらく見つめ合った。

「迷惑じゃなければ」俺は唾を呑む。「俺と、結婚してくれませんか？」

「はい」奈緒美は赤くなった顔を俯かせ、静かな声で答えた。

その頃には、床のほとんどが印刷紙に覆われていた。落ちてくる紙が新たな層を生み出し、歴史という言葉を連想させる。

親子の絵を眺めているところで、肩をつつかれた。振り返ると、髪を両端で結んだ女の子がにっこりして抱きついてくる。

「お父さん、遊ぼう！」

部屋の隅ではエプロン姿の奈緒美が微笑んでいる。彼女はもう眼鏡をしていなかった。コーヒーを淹れているようだ。そのなにげない風景が俺にはたまらなく愛しく思えた。

「お父さんってば！」まゆりがさらに絡みついてくる。

「忙しいからちょっと待っててくれ」俺は娘の温かい頭に触れる。「終わったら、公園に連れて行ってやるから」

「やった！」と娘はくるくる回って喜んだ。春の妖精みたいに可愛らしかった。

自分がいま何を印刷しているのか、だんだん解りかけてきた気がする。

プリンターは印刷を続けている。俺はそれをひどく懐かしい気持ちで見上げた。

「お義父さん」

若い男の声がした。

印刷紙の海の隙間で、スーツ姿の青年が床に額をつけていた。彼の傍らには化粧をした娘の姿があって、神妙な顔つきで頭を下げている。

「どうか、まゆりさんとの結婚を認めてください」

「あなた」と奈緒美に小声で促され、私は背筋を伸ばして腕組みした。

「まゆりを幸せにできるのか？」

「はい、必ず」真司君が顔を上げる。誠実そうな顔つきだった。

「うちの娘は手に余るぜ」私は悪戯っぽく笑ってみせる。「図体のでかい幼稚園児と暮らすような度胸がないと」

「お父さん！」

まゆりが顔を真っ赤にして怒鳴ると、奈緒美が堪えきれなくなったように吹きだした。真司君もぼかんとしてから、気が緩んだように息を漏らす。私も笑った。笑いながら涙が出た。結婚式で大泣きしてしまったのも、いまとなっては良い思い出だ。

そうして、印刷紙の雨は降り続く。

私はプリンターから目を離し、膝の上に収まる赤ん坊を見下ろす。孫はあぶあぶといいながら私の乾いた指を掴んでいる。柔らかい乳児の髪が腕に触れてくすぐったい。

「お義父さん、ずっとプリンター動かしていますけど、いったい何を印刷しているんですか？」

精悍な顔つきになった真司君が棚を見上げて訊ねた。

「さあ……、それがどうにも思い出せなくて」私は微笑みながら嘘をつく。

「ずいぶん古い型ですよね」

「まあね」私は孫を彼の膝元に戻してやりながら答えた。「子供の時からずっと使っているものだから」

「そんなに使っているのに壊れないというのはすごいですね。買い直さなくて済むし」

「いや、そう遠くないうちに壊れるさ」私は穏やかな気持ちで答える。「なぜだか、そんな気がするんだよ」

真司君がポカンとする。その膝にいる孫も同じような顔で私を見ていた。

やがて、赤ん坊がむくむくと大きくなっていく。植物の開花を早回しで眺める

気分だった。そして、彼が小学校入学まで一息に成長した頃には、私はもう自分の身体も支えられなくなって、寝たきりになっていた。

「おじいちゃん」大樹は赤ん坊の頃から変わらない丸い目で私を見下ろす。「ぼくがわかる？」

ああ、わかるよ。

大きくなったなあ。

そう答えたつもりだったが、声が出ていなかった。身体がとにかく重い。痛みも苦しみもなかったが、何も言ってやれない自分の非力さが切なかった。

印刷紙に包まれて横たわる私の枕元へ、大勢の人が集まっている。

私の手を握っている大樹。すっかりおばあさんになった奈緒美。出産後に線が太くなったまゆり。眼鏡をかけた真司君。旧友達もいた。年齢の割に若々しく見える茜、すっかり髪の毛なくなった進、背広を着た和。父と母はいなかった。もうとっくに他界している。きっと、これからあっちで会えるのだろう。

皆が目に涙を溜めていた。

しかし、哀しいことなんて何もない。

月並みで、取り立てて語ることもなかったかもしれないが、私は幸せだった。

ありがとう。

そう口を動かして、大樹の頭を撫でた。

急に眠くなって目を閉じた。

ガチャコ、という音を最後に、ずっと続いていたプリンターの音が途切れる。

最後の一枚が宙に舞って足許へ落ちた。

ぼくはそれを拾い上げ、横たわるお爺さんの絵をしばらく眺めた。吐き出されたばかりの印刷紙は、やはり産みだての卵みたいに温かい。胸に当てると、その温度が心臓にゆっくりと伝わってくる気がした。

「ご飯よー」

居間のほうから、お母さんの呼ぶ声がした。

「いま行くー」

ぼくは紙の散乱した部屋を出て行く。胸の奥にはまだかすかな温もりが残っている。